

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4077300244		
法人名	有限会社 ひがし		
事業所名	グループホームたかみ		
所在地	うきは市 浮羽町高見1750-1		
自己評価作成日	平成30年6月5日	評価結果確定日	平成30年7月30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php?action=kouhyou_pref_search_keyword_search=true
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社アール・ツーエス		
所在地	福岡県福岡市博多区元町1-6-16 TEL:092-589-5680 HP: http://www.r2s.co.jp		
訪問調査日	平成30年6月19日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】(Altキー+enterで改行出来ます)

気候に合わせて花見や散歩をしている。また季節ごとにイベントを行っており、例えば、そうめん流しや七夕やクリスマス会等を行っている。また、地域に開かれた事業所を目指しており、お互いの文化祭への作品の展示や見学・地域の子供たちの公民館での通学合宿のときは、お風呂場の貸し出しをし、交流会を行っている。地域の敬老会にも機材の提供なども行っている。ボランティアで、入居者との話し相手や将棋や囲碁の相手をしてくれる地域住民もいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「グループホームたかみ」は筑後平野と耳納連山に囲まれた閑静な土地にある2ユニット施設で、同市内には系列のGHがもう1か所ある。最近新たに、介護施設などを経営する関連法人も増えて、福祉車両や有閑施設の利用などで相互協力体制が取られるようになった。特に系列デイサービスにある大浴場では天然温泉での入浴と機械浴が可能で、安全な入浴が出来るようになったと、職員や家族からも喜ばれている。地域や行政との結びつきも強く、事業所の文化祭と地域の文化祭を相互に協力しながら開催したり、ボランティア協力も頂いている。地元小中学校との関係もあり、職場体験や課外実習、出前講座などでの子供たちとの交流は利用者にも元気を与えられている。長く利用された方の希望で看取りを行ったり、夜勤者と別に宿直者も配置して緊急時に備えたりと、地元で暮らす方の終の棲家となり、地域を支える活躍が今後も期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己 外部	項 目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設時よりの理念をよりわかりやすく、親しみやすい理念に変更し、それをホール内に提示し、毎朝理念の唱和をしている。	3年ほど前に、理念を改めて見直し、「たかみ」の名前を活かして「たのしく、かんしゃ、みんなで～」とわかりやすいものを作り上げた。理念と行動指針を定めることで、具体的な行動につながるよう共有を図っている。判断に迷った際などに理念に立ち戻った行動が出来るよう折につれて触れるようにもしている。	新入職者や無資格の介護助手のパート職員などに対しての理念の共有を図っていきたいと考えている。年に1回程度は会議でも改めて理念に関しての内容に触れて話し合う機会も作ってみてはどうだろうか。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	春に文化祭を行い、近所の方を送迎して来ていただいたり、地域の文化祭にも作品出品させていただいたりしている。	系列法人とも協力して文化祭や行事を企画し、文化祭などは地域の方も招いて大々的に開催して、年々参加者も増えており、地域の方も楽しみにされている。クリスマスや七夕の際には地域ボランティアにお声掛けして毎回何がしかの出し物もしてもらっている。毎月発行する「たかみ便り」は公民館での掲示や回覧板の配布もして状況や行事予定などのお知らせもしており、事業所の存在も知られてきた実感もある。	日常的に地域の方の立ち寄りや介護相談を受け入れられるような開けた施設づくりを目指したいと考えている。地域資源や今ある資産を生かした情報発信や、単独での認知症カフェなど定期的に地域の方を招き入れるような取り組みが検討されることにも期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々に、「たかみたより」を発行して、配布認知症についてのコラムを読んでいただいたり、地元の福祉委員の交流会をしたり、系列施設で行っている認知症カフェに参加して、認知症予備軍の方に予防をよびかけている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	民生委員や地元の市議会議員より、地域のイベントの情報の提供を頂きながら、参加させていただいたり、またこちらからもイベントへお誘いして、入居者との交流をもらっている。またどういった事業所になったほうがの意見を真摯に受け止め、サービス向上に活かしている。	2ヶ月ごとに開催し、事務室で行い、市職員、地域包括、駐在所、民生委員などもほぼ毎回参加されている。事故報告や状況、行事報告のほか、参加者から地域情報を頂いたり、アドバイスなども出され、行事内容に関して意見提案から行事の際の食事提供を実現した。年3回程度はクリスマス会などの行事と同日に開催し、その時は家族にも多数の参加をしてもらっている。議事録は全員に配布し情報を共有している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に参加していただいている。ホームの現状を伝えている。また、こちらの相談にきた方を市の相談窓口までつなげたり、サービス向上になるようにアドバイスをもらったりしている。	運営推進会議には毎回定期的に参加してもらっており、その際には参加者から市への要望を上げる場にもなっている。空き情報は毎月や随時市へも報告し、入居紹介を頂くこともある。介護申請時も窓口を訪問しており、担当とも顔見知りになり、気軽に相談することが出来る。系列施設での認知症カフェは市の広報誌にも載せており、相互協力がなされている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定例会の時に身体拘束廃止委員会を立ち上げ、会議を行っている。またその結果を運営推進会議の時に報告し、外部からの意見を取り入れている。	以前は玄関施錠しておらず、自由に出入りできたが、防犯上の管理のため、現在は施錠しており、外出の要望があれば、職員の見守りや付き添いで実施している。フロア内の防犯カメラと、センサーも設置されていて、万一の離脱に備えても記録に残るようになっている。地域のグループホーム部会でも認知症模擬訓練などを行い、地域との協力関係を築いている。転落防止のため車いすベルトの利用があるが、家族、医師の同意と解消に向けた定期的な話し合いも行っている。研修にも複数名で定期的に参加している。	

H30.6自己・外部評価(GHたかみ)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	6月に身体拘束と虐待防止の研修にスタッフ全員に参加してもらった。		
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人がついている入居者の受け入れもしている。また、それらが必要であると、スタッフや管理者が判断した場合は活用できるように、勉強し支援している。	入居と同時に成年後見制度利用になった方がおり、役所が介入して専門家の後見人を立てている。地域連絡会での事例の共有も行った。実際の後見制度をの活用を通して制度理解を進めており、外部での研修会にも毎年定期的に参加している。必要な際には主に施設長が関わって、説明や支援を行う体制である。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分に時間をさきゆっくり説明後に契約を結ぶようにしている。過去に契約を変更した場合は書面でご案内後説明会を開催して意見をいただきご納得していただいた。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ケアプランを立てる場合はご家族と本人のご意向を踏まえた上おこなっており、それにそった介護をおこなっている。運営推進会議には家族の皆さんにご案内を行っており、2か月に1度はご意見をいえる機会を設けている。	月1回以上面会にくる家族が3分の2程度おり、遠方の方も手紙や電話などで連絡を取り合っている。毎月のお便りのほか、個別にも担当による手紙をつけており、詳細に定期的な情報共有を行い、家族にも喜ばれている。運営推進会議にも多い時は半数以上が参加しており、運営に関しての意見や要望も頂き、以前には化粧レクや食事会の実施にもつながった。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1度定例会を行い、少なくとも1回は発言するように、と呼びかけている。	パート職員を含め全員が参加する全体会議が毎月あり、欠席者には会議ノートや口頭での伝達で共有している。全員に発言機会をもってもらい、職員の意見から勤務時間開始の調整をして、手厚い体制を負担なく提供出来るようになった。日頃も管理者や上長も現場におり、意見も上げやすい。施設長や社長との面談機会もあり、直接話すこともできる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	7月と12月に個人面談をおこない目標の達成や新たな目標の設定などはなしている。そして個人になった仕事や役割それにあった給与や賞与などこまやかに聞き取りをおこないあうようにしている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	職員の採用面接は法令順守の上おこなっている。個人の意見や能力にあった役職や職員配置になるように、配慮している。	20～60歳代までの職員がおり、65歳の定年はあるが、希望者にはパートでの勤務延長にも対応している。男女比は2:8程度で若い職員も多い。無資格で調理や介護助手的な役割を担う職員もおり、能力を生かしている。外部研修も全員参加を原則としており、スキルアップにも努めている。休憩スペースや宿直スペースもあり、休憩時間も昼とは分けて取られている。	

H30.6自己・外部評価(GHたかみ)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	研修に参加をうながし、入居者の人権が守られるように、職員の人権教育を行っている。	地域のグループホーム部会で、人権に関する学習会も毎年定期的開催されており、今年度は「ハラスメント予防とコミュニケーション」のテーマで外部講師を招いた研修が開かれた。基本的には全職員が参加するようにしており、毎回報告レポートも提出させ事業所内での回覧も行っている。	
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個人の能力にみあった研修に行けるように、シフトを考慮している。介護福祉士やケアマネ合格の場合はお祝い金を出し、資格取得を推奨している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	うきは市内のグループホーム部会での交流会をおこなっており、同じ悩みの共有化によりよりよいサービスを提供できるようにしている。また、社長が別法人で介護事業をおこなっており、そことの職員との交流も今後行っていきたい。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に家族と本人に面談を行い、希望要望を取り入れている。また、過去の生活履歴を知ることによって、本人の安心が得られる場合があるので、重点的に聞くようにしている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族にもよく聞き取りをして、ケアプランに反映させている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	モニタリングを行い、本人の希望を聞き、家族の要望を取り入れケアプランに取り入れている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者と親子孫の関係になれるように、入居者から裁縫を教えてもらったりしている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	イベントにも参加できるように、事前にお知らせをして、一緒に参加出来るように体制をとっている。		

H30.6自己・外部評価(GHたかみ)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	アルバムや思い出入れのあるものを苑に持ってきてもらい、一緒に見て思い出話を聞いている。近所の方の面会も随時受付けている。	家族の面会は多く、それ以外にも近隣の方や知人などが来られることもあり、自由に受け入れている。昔の仕事や環境の話などをきっかけに働きかけて刺激の誘発にもつながっている。ドライブの際に思い出の場所に連れて行ったり、家族に依頼して一時帰宅や外泊をする方もいる。支援が必要な際は車両を貸し出したり、職員も一時的に付き添って同行介助することもある。家族介助の際には過去の事故事例などから注意点なども伝えるようにしている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	お茶や食事の時間は皆さんに話がいくようにスタッフが気を配り支援をしている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後のご家族が苑に遊びに来て下さり、文化祭などのイベントにも参加してもらっている。また不要になったものを頂いたり苑の運営にも協力していただいている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に利用者と話し、意向を把握している。また希望が何うのが困難な場合は家族から、過去の暮らし方からヒントをもらうようにしている。	利用開始時に、関係施設などからも情報を頂きながらアセスメントを取得している。利用者ごとに担当者を決めて、半年ごとにアセスメントを取り直し、見直しの際にはカンファレンスで取り上げることで他の職員からの意見も取り入れている。以前はセンター方式の一部を必要の方のみ活用することもあった。	アセスメント様式に担当者名の記入がなかったため、シャチハタや記名などで、担当者明記がされるようにしてはどうだろうか。
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントシートに目を通し、その人の把握に努めている。アセスメント力の向上に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	無理なく、残存機能を活用してもらいながら、すごしていただけるように支援している。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のケアカンファを行い全職員の目で入居者を見て、その人にあったケアの提供に努めている。	ケアプラン見直しは定期的に半年で見直すが、毎月のカンファレンスで必要性が認められた時には随時にも見直しを行っている。担当者はアセスメント、ケアプラン実施のモニタリング、居室整理、家族への連絡などを担う。毎日のプラン実施チェックもあり、全職員が全員のプランを把握してサービスできるように共有している。担当者会議時には主治医や家族からも意見を照会して見直しに活かしている。	毎月末に担当者によるケアプラン実施のモニタリングがなされているが、モニタリング実施日と担当者名も明記されてはどうだろうか。担当者会議録に主治医や家族からの意見を照会しているが、参加と照会の種別がわかるように記録されることも望まれる。

H30.6自己・外部評価(GHたかみ)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録の付けたたの変更を予定しており、現在よりもよりケアプランにそった記録にしようとしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の面会時に意見や要望などを聞き、それを支援やサービス提供に反映するようにしている。例えば通院の支援や、家族での外出の支援等		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の福祉委員のボランティアでのお楽しみ会をしてもらったり、囲碁や将棋の相手をしてもらうボランティアをしてもらったり。文化祭での行き来をしたり、彼岸花や菜の花ひまわり畑へのドライブなど地元の観光スポットにでかけたりと楽しめるように支援している。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	事前にご家族と話しあい、受診が必要な場合はご家族の送迎の協力を受けながら支援している。	提携病院は複数あり、元々のかかりつけ医も希望があれば継続してもらっている。外部のかかりつけの場合は基本は家族支援で通院してもらい、健康状態や残薬の状況など口頭や書面で情報提供している。提携医の場合は2週に1回の訪問診療があり、毎週看護師による医療連携も受けられている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回、医療連携で看護師が来ているので、その時に身体状況を伝えたり、相談している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはアセスメントと介護添書をお渡しし、情報交換に努めている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	長く入所されてて、重度にならても、ご家族の希望があれば、スタッフとご家族で協力しあい、苑での生活を長く送っていただけたらいいようにと取り組んでいる。	入居時に意向を確認し、希望があれば、最期まで支援する方針である。入居時と重度化の際に主治医とともに説明の上、同意も頂いて支援している。医療支援が必要な際は適宜訪問看護も利用し、点滴などの支援も行っている。今までにも数名の方の看取りも行った。提携病院も24時間対応で看護師とも連携をとっている。看取りに関しての外部研修も持ち回りで参加し、内部での伝達も行っている。	

H30.6自己・外部評価(GHたかみ)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	今年には行っていないが、2年に1度救急救命の講習を受講している。初期対応においては、社長が講師になり、今後行っていく予定。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	半年に1度避難訓練を行っている。地域の方や消防署の協力体制がとれるように努めている。	朝倉の豪雨災害時も、施設が比較的高台にあることで被害はなかった。それ以降は防災マップの整備やマニュアルを見直し、備蓄物も量と中身をかせ、水や食料品も全員の3日分以上を確保している。年2回の訓練の内1回は消防署立ち合いで行い、以前は地域の方の参加もあったが最近ではなかった。運営推進会議で地域の避難場所として使ってもらえるよう話もしている。	地域の避難場所として提供もされているので、訓練に関しても地域の方の協力を頂いたり、地域の防災訓練の情報を収集しても良いのではないだろうか。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライベート空間への配慮や言葉使いに気を付けている。往診の受診や着替えなどは居室で行うようにしている。	声掛けや言葉かけに関しても注意を払い、以前に期間を定めて2ヶ月程度目印の腕章をつけて、日替わりで接遇リーダーを定め、注意喚起を促したことがあった。毎年1名ずつ「明るい介護職場づくり塾」という勉強会で、職場内のチームワークや、コミュニケーションなど全般に亘っての研修を受講した。お便りやパンフレットでの写真の利用は口頭で同意を頂いたものに留めている。	パンフレットやお便り、ホームページでの写真の利用があるが、出来れば書面で利用目的の説明、同意を頂くことが望まれる。今後の検討に期待したい。
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	どこにドライブにでかけたいかの意見をきいたり、おやつや食事のメニューの決定に日常会話から聞き取るようにしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1人1人のペースに合わせて、朝が苦手な人がゆっくり朝食を召し上がっていただけるように、時間差でも対応している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問カットで、おしゃれや身だしなみがきれいになるように支援している。またお出かけの際はオシャレできるように支援している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	楽しい食事を心がけ、配膳やテーブル拭きなどを手伝ってもらっている。できる方は食事のあと食器を運んでもらっている。	以前は調理済み食材の配達だったが、2年前からはメニューと原材料のみの配達に切り替え、内部で職員が調理するようにした。朝食は買い物から事業所で行い、利用者と一緒に行くこともある。配下膳や下ごしらえなど出来る方には手伝いもしてもらっている。職員も同じ時間に同じものを一緒に食べている。食事の感想や食べたい物も聞き取り、可能な際は個別対応や随時の変更もしている。近くにアイスなど軽食を食べに行ったり、和菓子を添えてお茶会をすることも定期的に行っている。	

H30.6自己・外部評価(GHたかみ)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	摂取量・水分量のチェックを毎食行っている。1人1人のリズムに合わせ食事の時間をずらす、工夫をしている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	義歯の洗浄・口腔内の残物のチェックを行っている。又個人の状態に応じて訪問歯科診療も取り入れている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	時間を決めてトイレ誘導を行っている。可能な限り布パンツで対応している。	各ユニットごと様式が異なり、全員分の排泄チェックシートがあり、個別で1ヶ月分の排尿、排便時間が分かるように記録されている。自宅でリハパン利用だった方にも、状態を見ながら積極的に布パンツ利用も進め、負担の軽減に向けた提案を行っている。便秘の期間も利用者ごとにチェックし、必要時に処置に繋げるようにもしている。	ユニットごとに若干排泄チェック表が異なるが、統一を検討されてはどうだろうか。また、支援経過記録では記載されているが、チェック表上はパット交換、トイレ排泄、失禁の区別がないため、時間帯別に状況が分かるようにし、トイレ排泄に向けた改善の材料となるようなチェック表の利用が望まれる。
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分補給をこまめに行う。又、簡単な体操へ参加もうながしている。DRとの連携を取り、下剤の適切な服用も行っている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日の入浴を基本としているが、本人の意向、体調のバランスを考えて入浴を行っている。	家庭用のユニットバスで、ユニット間の造りは共通である。基本的にはそれぞれ週2～3回、昼過ぎからの入浴だが、希望があった際や汚染時には随時の入浴にも対応している。寝たきりなどで対応が難しい場合には系列デイの大浴場や機械浴を使うこともできる。入浴剤もその日の入浴対応者に確認して適宜使用している。柚子など季節の行事浴など提供することもある。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	1人1人の生活パターンを考えて日中でもベッドで昼寝をして頂いたり、夜はゆっくり休めるようにやわらかい光の夜光灯を使用している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬についてはスタッフ全員で確認しあっている。症状の変化をDRIに伝えて対応している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の状態に合わせ、買い物を一緒に行ったり外出等もいっている。		

H30.6自己・外部評価(GHたかみ)

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	知人や家族の送迎により外出を楽しんでいる入所者もいる。また、施設の買い物に同行してもらったり、季節に合わせてドライブの計画をたてて出かけている。たまに散歩にでかける。	各ユニットそれぞれで外出レクを企画し、別個に外出している。花見や紅葉狩りなど季節の外出のほか、計画外でも随時天候の良い日などに気軽にドライブなどにも出かけている。自然にも囲まれているため散歩も楽しみ、軒先でちょっと日向ぼっこをしたり、横を走る電車を眺めたりもしている。意欲低下が見られる方も皆と一緒に働きかけて外出を楽しんでいる。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金は苑で管理をしているが、外出の際は個人個人で財布を持ち、買い物をする。全員ではない。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	月に1度、たかみ便りと共にご家族への手紙を書く入居者もいる。電話も自由にかけられるのに支援してる。年賀状を家族に書いてもらうように支援している。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者とスタッフで作った季節の折り紙などの作品を飾ったり、植物を置いたりしている。又個々にクッションを椅子に敷きゆっくり過ごしていただいている。	1,2Fに各ユニットが分かれており、概ね造りは共通である。ホールを中心に居室が配置され、スタッフルームもホール内に内接しており皆通しも良い。南面に掃き出し窓があり、眺めも良く、日光も良く差し込み明るい。季節感が感じられるように花を飾ったり、作品を貼ったりとにぎやかな雰囲気である。居室との行き来もしやすいため、和やかに皆で過ごされる方も多い。内周をめぐって周回した歩行訓練も可能である。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホール内の数箇所に椅子やソファを置き、1人、又は数人のグループで集えるように工夫している。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	たくさんのものは置けないが、家族の写真やなじみのタンスなどを置き、落ち着ける工夫をしている。	収納を含め8畳ほどの広さで、基本は畳敷きの和室仕様だが、フローリングへの変更もできる。戸口には各ユニットの名前の柿、梨をあしらった可愛い木製の表札があり、暖かみを添えている。持ち込みも自由にテレビなども置けるが、リビングで過ごすことが多い。木調の介護ベッドは備え付けてあり、クローゼットも広いので、シンプルに整理されていた。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	雑多に物を置かずに、車椅子の自走を可能にしている。浴槽・トイレの場所が分かる様に大きく書いている。配膳の手伝いが出来るよう全てに名前を書いている。		